

変体仮名の効果的習得法に関する考察

斎 藤 達 哉

1. はじめに

稿者は、2017 年度に、専修大学からの研究助成を受けて、「変体仮名の習得メカニズムの解明と効果的習得法の開発に関する研究」を実施した。本稿は、変体仮名を中心とした仮名（崩し字）の習得についての、問題点及び指導上の留意点をまとめるものである。

2. 用語について

本稿で用いる用語のうち、「仮名」「変体仮名」「平仮名」「仮名文」の 4 語について規定しておく。

「仮名」と記した場合は、「変体仮名」と「平仮名」との両方を指す。

「変体仮名」は、平仮名とは異なる字母から発生した仮名（例えば、音韻/i/に対する「𐄂」（字母は「伊」）と、現代通行の平仮名と同じ字母から発生した仮名のうち、現代通行の平仮名とは字体が大きく異なるもの（例えば、音韻/i/に対する「𐄃」（字母は「以」）との両方を含む。

「平仮名」は、現代通行の平仮名と同じ字母から発生した仮名のうち、字体もほぼ同様のものを指す。今日、私達が使用している平仮名は、便宜上「現代通行の平仮名」と称する。

「仮名文」は、和歌、散文（和文）のことである。これらは、仮名だけで表記されるか、仮名と漢字を併用して表記されている。表記の視点から、「仮名」主体で表記された資料という意味で「仮名文」称する。

3. 仮名習得に当たっての障壁 ―表記体系の問題―

仮名及び仮名文は、習得する上で合理的でない面を持っている。

習得上の第1の障壁は、仮名が《一つの音韻に対して複数の字体での記述が可能なこと》である。例えば、音韻/k a /に対しては、「か」「㍑」「㍑」などの字体が存在する（「異体仮名」あるいは「同音の仮名」の存在）。「か」と「㍑」「㍑」とは異なる字母から発生しており、「㍑」と「㍑」とは同じ字母から発生している。表音文字（音節文字）で1音に対して複数の字体が共存することは、文字習得のためには負担が大きい。1900年の「改制小学校令施行規則」での仮名字体の整理は、この点に対応した施策であった。

表音文字で1音に対して複数の字体が共存する事例は、欧文に用いるアルファベットにも認められる。大文字のアルファベット「A」と小文字のアルファベット「a」との共存がそれであるが、「A」は文や固有名詞の表記始点に用いるという規則（習慣）が存在する。仮名でも、「㍑」は意味単位の表記始点に用い、「㍑」は意味単位の表記始点に用いないという習慣が存在する（「異体仮名の使い分け」）。しかし、この説明を全ての異体仮名（同音の仮名）に適用することはできない点で、アルファベットのそれとは性質が異なる。

習得上の第2の障壁は、《複数の仮名が連続して記されていること》（連綿していること）である。連綿は、仮名によって表記する際には、速く書くことができるという利点を持っている。また、ほとんどが意味単位内での文字の連続であり、本来は語の分節機能に貢献しているものである、欧文が語ごとに分かち書きを行うのと同様の原理である。

しかし、連綿は、これから学習しようとする人達にとっては、文字を読み取ろうとする際の負担となる。学習者からよく聞かれる「どこからどこまでが1文字なのか」という質問は連綿に起因するものである。

習得上の第3の障壁は、仮名文が《仮名と漢字の併用を行っていること》である。仮名だけで表記される仮名文は皆無ではない。しかし、多くは、仮名による表記を主体とする中に漢字を併用している。

例えば、和歌を記述した色紙を教材として用いた場合でも、仮名の文字列

の中に漢字が出現している。次に示すのは、泉屋博古館蔵「寸松庵色紙」（古今和歌集・秋・下・312）であるが、33 字の文字列の中に「山」「秋」の 2 字種 2 字の漢字が出現する（四角囲いが本文中での漢字。仮名の右側に傍書は変体仮名の字母）。

つらゆき
^遊
 ゆふつくよをくら
^{尔 那 可}
 の^山になくしかの
^{盤 无}
 こゑのうちにや^秋
 はくるらむ

漢字が混在する割合は、物語文ではさらに増加する。次に示すのは、専修大学図書館蔵『源氏物語』（伝中山孝親写、1500 年代写本、資料 ID:100949213）である。ここでは、冒頭半丁（1 面）149 字（及び、くの字点 1 つ）の中に、「御」「時」「女」「更」「衣」「給」「中」「時」「我」「物」「程」「宮」「人」「心」の 14 字種 19 字の漢字が出現する。

^{徒 連}いつれの^御^{尔 可}時にか^女^御^更^衣^{多 佐}あまたさふ
^介らひ^給てける^中にいとやむことなききは
^{尔 八}にはあらぬかすくれて^時^{めき}^給ありけり
^者はしめより^我はとおもひあかり^給へる^御かた／＼
^{楚 連}めさましき^物におとしめそねみ^給ふおなし
^程それよりけらうのかういたちはまして
^泰やすからすあさゆふの^宮つかへにつけても^人
^三の^心をのみうこかしうらみをふつもりにや

仮名と漢字の併用は、現代日本語の表記においても行っている。現代日本語の表記では、仮名文よりも漢字の割合が多く、「漢字仮名交じり文」と称される。仮名と漢字の併用は、双方の文字体系を習得した人にとっては、書き易く、読み取り易い表記体系であることは言うまでもない。

文字の習得では、《読めること》と《書けること》の両方が行われるのが通常である。新たに変体仮名を習得しようとする人達は、大きく 2 グループに分けることができる。1 グループは、書（書道）を身に付ける中で変体仮名を習得する人である。この人達は、漢字についても仮名についても《読める

こと》と《書けること》の両方を身に付けていく。したがって、仮名の文字列の中に漢字が併用されていても、大きな負担にはならないと思われる。

もう 1 グループは、《読めること》だけを目的として変体仮名を習得する人達である。本稿で対象とするのは、このグループの仮名の習得についてである。この場合には、仮名の文字列の中に漢字が併用されていることは、大きな負担となる。

4. 効果的習得のために

4. 1. 「音」を先に提示することの有効性

一般に、表音文字「音」と「形」(字体、字形、書体)を有しているので、表音文字の習得のためには、「音」と「形」を一致させることが必要となる。

小助川(2013)¹は、習得の最初の段階では、学習者に対して現代通行の平仮名と漢字による翻字を提示した上で、字母の解読作業を行う方法が有効であることを述べる。「形」と「音」のうち、「音」についての情報を先に与え、「形」(字体)を記憶させるのである。

このことによって、副次的にもたらされる効果も大きい。

(1) 漢字、踊り字の位置の把握が可能になる

併存(学習者の意識としては「混在」)している仮名以外の要素(漢字、踊り字)の位置を知ることができる

(2) 濁音の位置の把握が可能になる

現代仮名遣い、及び、高校までの教科書の古典本文には濁点が付されている。

そのため、学習者は、濁点が付されない古典本文に慣れていない。

(3) 仮名遣いの乱れている箇所把握が可能になる

実際の古典本文では、歴史的仮名遣いから外れているものがある。

しかし、高校までの教科書の古典本文は、歴史的仮名遣いに修正

¹ 高田智和・小助川貞次・堤智昭・斎藤達哉・小木曾智信・小野博「古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビューアの開発」(日本語学会 2013 年度秋季大会ブース発表、2013 年 10 月 27 日、静岡大学)

されている。そのため、学習者は、濁点が付されない古典本文に慣れていない。

4. 2. 必要な「形」だけを提示することの有効性

仮名文の文字解説、及び、習得の初歩の段階では、不要な情報を排除し、必要な情報だけを与えるようにしたい。

仮名文の文字解説、及び、習得には、いわゆる「仮名字典」をよりどころにすることが一般的である。仮名字典は、学習者が解説に取り組んでいるテキストに出現しない文字まで含んでいる。初歩の段階で情報量が多いことは、逆に習得の負担になる。

一方で、仮名字典は、漢字の崩し字を含んでいないことが多い。漢字の崩し字までを含む字典も存在するが、草体化した漢字を検索するのは容易ではない。

また、仮名文の文字（筆を用いた手書き文字、または、版木に掘られた文字）は、同じ字体であっても個人による差を持っており、字典に掲載された文字の図像と完全一致するものがない。これまでの指導の経験上、資料と字典との図像が似ているかどうかの判断は、個人による差が大きかった。

こうしたことを考慮した結果、導入の段階では、解説に取り組む資料から採取した仮名、及び、漢字の「字体表」を用いることが有効であると考えた（図1、図2参照）。

「字体表」の作成に当たっては、次のことに留意している。

（1）仮名の字体表には、変体仮名だけでなく平仮名も示す

- ・筆文字の解説に慣れていない人にとっては、平仮名と同じ字体であってもそれと気づかないことがあるからである
- ・情報量が方になることを避けるため、平仮名の字母はあえて示さない

（2）同じ字体であっても、複数の図像を示す

- ・平仮名について、同じ字体に複数の図像を示す場合、崩しの度合い順（書道の観点）ではなく、平仮名に近いものから配列する

- ・同じ字体に複数の図像を示す場合、可能であれば、上から連綿しているものと、下へ連綿していくものも示す

(3) 文字の骨組みを示すものとして、「学術情報用変体仮名」² のグリフを併せて示す

(4) 似た字体（字型の同じもの）についての注意書きを付す

(5) 連綿している文字列のうち、合字、または、頻出する連綿についても示す

(6) 字体表は、完成されたものではなく、1 丁表（解説に取り組もうとしている仮名文の第 1 ページ）だけから文字を採取できる範囲のものとする

(7) 字体表は、エクセル等の形式で提供し、1 丁裏以降を解説するに伴って、学習者が自身で増補できるようにする

- ・こうしておくことで、同じ字体に複数の図像がある場合に、学習者が自身の感覚に合わせて配列を変えることが可能になる

² <http://kana.ninjal.ac.jp/>

仮名字体表 (専修大学蔵中山本源氏物語「桐壺」01才)

本文	変体仮名 variant kana	字様	注記	關字
あ	あ			あ
い	い			い
う	う			う
お	お			お
か	か	於	平仮名「か」 と同じ字様	か
き	き	可		き
く	く	起		く
け	け			け
へ	へ	介		へ
こ	こ	希		こ

本文	変体仮名 variant kana	字様	注記	關字
さ	さ			さ
し	し	佐	通字「し」と 読んでいる	し
す	す			す
そ	そ	楚		そ
た	た	多		た
ち	ち			ち
つ	つ	徒		つ
て	て	天	平仮名「て」 と同じ字様	て
と	と			と
な	な	奈	平仮名「な」 と同じ字様 「る」読んでいる	な

本文	変体仮名 variant kana	字様	注記	關字
ふ	ふ			ふ
よ	よ			よ
し	し			し
ぬ	ぬ			ぬ
ね	ね			ね
の	の			の
の	乃	乃	平仮名「の」 と同じ字様	の
の	能	能		の
は	ハ	ハ	平仮名「ハ」 と同じ字様	は
は	者	者		は
ひ	ひ			ひ
ふ	ふ			ふ
く	く			く
お	お			お

仮名字体表 (専修大学蔵中山本源氏物語「桐壺」01才)

本文	字種 かな	字母	注記	備考
と	二	二	「と」は「と」の略字	
じ				
めめめめ				
も	も			
め	め			
やわや	や			
ゆ				
よ				
ら	ら			
り	り			
り	李		「り」は「り」の略字	
る	る			
れ	連			
を	を			

本文	字種 かな	字母	注記	備考
と				
う	三			
み	多			
か				
た				
こ				
と				
より				

本文	字種 かな	字母	注記	備考
と				

漢字字体表（専修大学蔵中山本源氏物語「桐壺」01才）

本文	熟語使用語例	音訓	注記	→	漢字
衣	更衣	イ		→	我
御	御一（接頭語）	おほん	御ほかの ニゴロ御通	→	
御	御一（接頭語）	おほん		→	
御	女御	ゴ	御ほかの おほん / も 御通	→	
更	更衣	コウ		→	
心		こころ		→	
給		たまふ		→	
時	御時 時めく	とき		→	
中		なか		→	
女	女御	ニメ(ウ)		→	
人		ひと		→	
程		ほど		→	
宮		みや		→	
物		もの		→	

本文	熟語使用語例	音訓	注記	→	漢字
				→	我
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	
				→	

4. 3. 翻字作業以外の目的を示す

文字の解説は単調な作業になりがちである。

日本語の文字・表記史に軸足を置いた場合、前出の字体表に対して、学習者自身が新たな字体を追加したり、同じ字体に複数の図像がある場合に学習者が自身の感覚に合わせて配列を変えたりして、完成させるということを目的にすることも、学習意欲を高める工夫の一つである。

また、現代にない表記上の工夫についての知識をあらかじめ提供しておき、それに該当する箇所をリストアップさせることも、学習意欲を高めるために有効である。現代にない表記上の工夫とは、「異体仮名の使い分け」や、「同じ字体の使用回避」などである。

前者は、板本の場合に顕著である。後者は、専修大学図書館蔵『源氏物語』冒頭半丁では、次の2か所が該当する。(1)では/k i /が異なる字体で表記され、(2)では2回目の/k a t a /が踊り字(くの字点)で表記される。

(1) やむことな^起き^八きは



(2) 御^多かた／＼



5. まとめ

上記で述べたことを踏まえ、教材「変体仮名練習帖〔試行版〕」³を作成し、web上で公開した。この教材は、同じくweb上で提供している「変体仮名学習補助ビューア『源氏物語』『桐壺』(専修大学図書館蔵)」⁴と併用しながら、学習者が自習に活用することを想定したものである。

³ <http://mojilabo.com/wp-content/themes/mojilabo/reference/study/study.pdf>

⁴ <http://mojilabo.com/wp-content/viewer/viewerdata/index.html>

<http://mojilabo.com/wp-content/viewer/viewerdata/index.html>

付記

本稿は、平成 29 年度専修大学研究助成（1 種）「変体仮名の習得メカニズムの解明と効果的習得法の開発に関する研究」の成果の一つである。